

天台大師伝の研究

天台大師の生涯における事蹟を知ること、天台教学の構造や特質を説明しようとする時、不可欠な大前提となるであろうことは、いうまでもない。人の思想なり信条は、その人の生きざまに現われるはずであろうから、その人の生き方を凝視するなら、その人の思想や哲学は、一層の具体性をもって説明されるはずである。

さらに一般的な問題としていえば、ある人の生涯を問うということは、そう問う自分自身の生きざまを問うことに外ならないのであって、恐らく自己の生活信条のあり方のいかんを問うことにもなるであろう。その意味では、天台大師の伝記を究明することは、常に「宗の学」としての新しい問題と意義を持つはずである。

さて、天台大師伝の研究としては、従来次のような研究成果がある。

1、佐藤哲英著『天台大師の研究』（昭和三六年、百華苑）第

三章「天台智顛の生涯」。

2、LEON Hurvitz “CHIH-I—An Introduction to the Life and Ideas of a Chinese Buddhist Monk—” (1960—1962 昭和三五—三七年 *Mélanges Chinois et bouddhiques, Bruxelles*)。

3、上村真肇 解題訳註「隋天台智者大師別伝」(『国訳一切経史伝部一〇』昭和四二年、大東出版社)。

4、京戸慈光著『天台大師の生涯』(昭和五〇年、第三文明社)。
5、新田雅章著「天台智顛の生涯」(『智顛』昭和五七年、大蔵出版)。

6、多田厚隆著『(重文)天台大師像解説』天台大師の思想と生涯』二篇「天台大師の生涯——隋天台智者大師年譜事蹟——」(昭和五七年、同朋舎)。

一見して、天台大師の伝記については、これらの研究で尽されているように思われるであろうが、視点を変えてみる

池 田 魯 参

と、実際にはそのようなことはない。どの研究領域でもこのことは同じだと思ふのであるが、解明されなければならない不明の諸点は、以然として残されたままであるからである。

本論で、今改めて問おうとしているのは、正しくそのような問題についてである。

先般、私は、『天台智者大師別伝』と並び、最も古く成立した天台大師伝の確かな研究資料として知られる『国清百録』の註解を終え、『国清百録の研究』（昭和五十七年、大蔵出版）として刊行した。

そこで、『国清百録』の記事を合せて、天台大師伝を再検討してみた結果、従来はあいまいであったり、軽視されるか無視されていた歴史的な事項が、種々に解明されることが知られたのである。その一部分については「天台入山前後の智顓」（印度学仏教会誌三十一巻二輯、昭和五七年）と題して、すでに発表したところである。

そこで、この論考においては、智者大師伝の全体にわたって、問題点に検討を加え、従来の学説の誤りはこれを修正し、見落されていた問題については補説したいと考える。

便宜上、次のような構成と順序で論述したい。

目次

- 一、天台大師伝の形成と展開。
- 二、天台大師の生涯。

天台大師伝の研究（池田）

1 誕生。

2 育い立ち。

3 出家。

4 修学。

5 陳都金陵時代。

6 天台山時代。

7 金陵帰京。

8 廬山留錫。

9 荊州時代。

10 天台帰山。

11 入滅。

三、天台大師滅後の天台教団。

一、天台大師伝の形成と展開。

天台大師伝の研究資料として、最も古く最もよくまとまつたものは、なんとといっても、

(1) 灌頂撰『天台智者大師別伝』（正蔵五〇巻所収）。

である。末尾に付記されている撰述由来によって、本書成立の事情が知られる。

灌頂多幸、謬逢嘉運、濫齒輪下、十有三年、戴天履地、不測高深、以開皇二十一年、遇見開府柳願言、賜訪智者、俗家桑梓、入道縁由、皆不能識、克心自責、微知醒悟、仍問遠祖於故老、即詢

受業於先達、瓦官前事或親承音旨、天台後瑞隨分憶持、然深禪博
慧、妙本靈迹、皆非淺短能知、但恋慕玄風、無所宗仰、輒編聞
見、若奉慈顏、披尋首軸、涕泗俱下、謹狀。

開皇二十一年(仁寿元年のことであろう。開皇の年号は二
十年で終るからである。西紀六〇一年)のことである。灌頂
は開府柳願言から、天台大師生前の俗家の桑梓や、入道の縁
由について問われたのであるが、充分に答えることができな
かった。十三年間も大師の輪下にありながら識るところがな
かった自分の粗忽を責めている。そこで、灌頂は大師の遠
祖、郷貫について故老たちに問い、受業、修学については先
達たちに詢い、瓦官寺での行歴については音旨を承けた自か
らの見聞にもとづいて記し、天台山の後瑞についてはそれぞれ
記憶にたよって記した、という。かくして『天台智者大師
別伝』一巻が成ったのである。

「故老」や「先達」に尋ねたという点からみると、例えば
『国清百録』の巻頭に出る灌頂の「序文」では、渚宮の法論
と、会稽の智果が著わした二種の伝記があったことを記す。
又、『百録』(「二一」)に収める徐孝克撰「天台山修禪寺智顛禪
師放生碑文」がある。徐孝克(五二七~五九九)は、徐陵(五
〇七~五八三)の第三弟で、碑文を撰述した当時の肩書は「陳
通直散騎常侍国子祭酒東海徐孝克」とみえている。『別伝』
が、それ以前に存在したであろうこれらの伝記資料を参考に

したことが知られるのである。

ともかく、灌頂の『別伝』は、「開皇二十一年」から四年
ほどの期間をかけて出来上がったらしい。

それは次のような記事によって証明できる。『百録』(「八六」
条の「僧使対問答」のなかで、大業元年(六〇五)十月二十日
に、天台山から遣わされた僧使の智瓌が、煬帝の問に答え
て、灌頂が記録した『行状』一巻が山内にあることをいう。
さらに、棲靈寺に辞去した智瓌の下に、柳願言が訪ねて来
て、二月に碑を建てたいので、出来るだけ早くその『行状』
を上呈するよう宣勅している。又、「(九一)条の「勅報百司
上表賀口勅」で、この『行状』一巻を上ったことを記すが、
それは大業元年十一月二十四日以後のことになる。

ともあれ、この『行状』によって、『百録』(「九三」条の柳
願言撰「天台国清寺智者禪師碑文」が成るわけである。

因みに『百録』(「九四」条の皇甫毘撰「玉泉寺碑」は、大
師の行実を記すことは極めて少ないのであるが、あるいは柳
願言の碑文が成る頃にできたのであろうか。両者の碑文の間
に重複する記事がほとんどみられない点などはそのことを証
するように思われる。

このようにみると、『別伝』の前に成る、

(2)徐孝克撰「天台山修禪寺智顛禪師放生碑文」(『百録』
「二一」)。

があり。『別伝』の後に成る、

(3) 柳願言撰「天台国清寺智者禅師碑文」(『百録』〔九三〕)。

(4) 皇甫毘撰「玉泉寺碑」(『百録』〔九四〕)。

などが研究資料として注意される。

これら『別伝』成立前後の諸伝に合せて、(5)『国清百録』所収の各条の資料が加味されなければならない。すでに論じたところであるが、灌頂が、物故した智寂の編集計画の後を承けて『百録』を集成したのは、『別伝』の著述と並行してほぼ同じ頃、同じ動機の下で始められたことが知られるからである。したがって、『百録』各条の記録は、『別伝』の行歴の骨旨に豊かな血肉を与えるであろう。又『百録』は『別伝』上呈後、大業三年(六〇七)二月二十七日(〔九二〕)までの記録をとどめるから、大師寂後の天台教団の動向を知るための一次資料となるのである。

ところで末節の事項であるが、大正蔵経所収の『別伝』では、灌頂の撰述由来の跋文に続けて、「銑法師云」として次のような四行ほどの文を加えている。

銑法師云、大師所造有為功德、造寺三十六所、大蔵経十五蔵、親手度僧一萬四千餘人、造栴檀金銅素畫僧八十萬軀、傳弟子三十二人、得法自行不可称数。

この一文は後世の附加であろう。『天台靈応図本伝集』巻一に収める『別伝』のように、灌頂の跋文で終わっているのが、

原初の形であろう。又、この「銑法師云」以下の文のなかにみられる記事は、後世の諸伝に検索してみても関連がみられないもので極めて特異なものである。「銑法師」についても調べはつかず不明であるが、道澄述「智者大師述讚序」(『伝教大師全集』巻四所収)に、

銑公叙云、至如南岳慧思、天台智者、並位隣得忍、解貫惣持、福慧二蔵兼利、具足精誠、絶代神異動人、之此師資、世所希有、師徒濟濟、可不盛哉。

と引用する「銑公」と同人であり、彼の説であろうか。

ところで灌頂は大師の遺稿を修治する際にしばしば伝記研究にとって見落せない重要な記事をとどめている。

例えば『法華文句』(正蔵三四卷一頁上)に、

余二十七、於金陵聽受、六十九、於丹丘添削。

と記している。又、『法華玄義』(正蔵三三卷六八頁上)には、幸哉灌頂、昔於建業、始聽經文、次在江陵、奉蒙玄義、晚還台嶺、仍值鶴林、荆揚往復、途將萬里。

と出る。『摩訶止観』巻一(正蔵四六卷一頁上中、三頁上)には、さらに詳細な大師の行実について記録するところがある。

これらの灌頂の記事は、『涅槃玄義』巻下(正蔵三八卷一四頁中下)にみえる灌頂自身の伝との関連において注意されなければならぬものである。

灌頂の没(六三二年)後、唐貞観十九年(六四五)に、道宣は

『統高僧伝』三〇巻を著し、「習禅篇」のなかに「陳南岳衝山積慧思伝」と並べて、

(6)隋国師智者天台山国清寺積智顛伝(正蔵五〇巻五六四頁上)を載せている。道宣の「智顛伝」が『別伝』に依拠していることは、伝末に次のように記していることで明らかである。

沙門灌頂、侍奉多年、歴其景行、可二十餘紙、又終南山龍田寺沙門法琳、夙預宗門、觀伝戒法、以德音遽遠、拱木俄森、為之行法、広流於世、隋煬末歳、巡幸江都、夢感智者、言及遺寄、帝自製碑、文極宏麗、未及鐫勒、值乱便失。

この文によると、鐫勒はならなかったが、隋煬帝が自身でつくった碑文があったことが知られる。又、法琳は、大師から戒法を伝え、当時広く世に流布させたという。

法琳(五七二〜六四〇)の伝は、『統高僧伝』巻二五(六三六頁中)に、「唐終南山竜田寺積法琳伝」として記されている外に、彦琮撰『唐護法沙門法琳別伝』三巻(正蔵五〇巻一九八頁)の詳伝がある。又、法琳の撰述である『破邪論』二巻、『弁正論』八巻(共に正蔵五二巻所収)が伝存する。ともかくこの法琳が天台大師の行法を尊重した人であり、又、天台宗門に連なる人であった点は、銘記されてよいだろう。

ところで、道宣が、慧思―智顛―灌頂の師資の伝を、「習禅篇」に収めたことは注目にあたいたい。天台大師の教団は、当時は禅宗としての評価が与えられていたわけである。

主だった大師の後継者たちは、多く「習禅篇」の中に出てくる。

○隋天台山国清寺積智越伝(波若伝、法彦伝を附伝する)(五七〇頁下)。

○唐天台山国清寺積灌頂伝(智晞伝、光英伝を附伝する)(五八四頁上)。

○唐天台山国清寺積智操伝(五八五頁中)。

○唐天台山国清寺積普明伝(五八六頁上)。

○唐台州国清寺積智晞伝。(五八二頁上)。

これらの人々は大師の弟子として記されるのであるが、大師と関係があったことを記す人でも、次のような僧は「習禅篇」に収められている。

○後梁荊州枝江禅慧寺積惠成伝(五五七頁上)。

○隋九江廬山大林寺積智鍔伝(五七〇頁中)。

○揚州海陵正見寺積法嚮伝(六〇五頁下)。

○荊州四層寺積法顛伝(五九九頁下)。

しかし一方では、天台大師の教化は多方面に及んだのであり、『別伝』や『百録』に出る僧で、次のような人たちは「義解篇」のなかに収められている。

○陳楊都白馬寺積警韶伝(四七九頁下)。

○陳楊都大彭城寺積宝瓊伝(四七八頁下)。

○陳楊都興皇寺積法朗伝(四七七頁中)。

○隋江表徐方中寺釈慧暉伝(四九四頁上)。

○隋丹陽撰山釈慧曠伝(五〇三頁中)。

○隋東都内慧日道場釈道莊伝(四九九頁下)。

○隋東都内慧日道場釈法論伝(五〇〇頁上)。

○唐京師大莊嚴寺釈保恭伝(五一二頁下)。

○唐京師延興寺釈吉藏伝(五一三頁下)。

さらに「雜科声徳篇」には、

○隋東都慧日道場釈智果伝(七〇四頁中)。

○隋杭州靈隱山天竺寺釈真觀伝(七〇一頁下)。

が収められており、又、「感通篇」には、

○釈法濟伝(六五二頁上)。

が収められている。

外にもそれぞれの僧伝のなかで、天台大師との関連を記すものがあり、例えば「感通篇」に、

○荊州内華寺釈慧耀伝(六六二頁上)。

○荊州青溪山釈道悦伝(六六一頁下)。

○後梁荊州玉泉山釈法行伝(六五八頁上)。

があり、「読誦篇」には、

○唐終南山藍谷悟真寺釈慧超伝(六八七頁中)。

が、「遺身篇」には、

○隋九江廬山沙門釈大志伝(六八二頁中)。

があり、「興福篇」には、

○法素伝(六九七頁下)。

がある。

これらの『続高僧伝』所載の人々と天台大師との交渉関係を精査することは、大師の伝記の周辺にある歴史的な種々の様相を一層明確にするはずである。

道宣の『続高僧伝』の後では、(7)六祖湛然(七一―七八二)の『輔行伝弘決』卷一之一(正蔵四六卷一四二頁中―一四九頁下)に出る伝記研究が注意すべきものである。

湛然門下の行滿・道邃に天台学を学んだ、我が国の伝教大師最澄は『天台靈応図本伝集』卷二(伝教大師全集卷四)に、

智者大師伝一

智者大師述讚二

天台大師略伝三

智者大師影堂記四

の四種を将来しているが、うち「天台大師略伝」のみを欠いている。伝存するのは、

(8)顔真卿撰「天台山国清寺智者大師伝」。

(9)貝山沙門道澄述「智者大師述讚序」。

(10)長安沙門曇彛撰「国清寺智者大師影堂記」。

の三点の資料である。

顔真卿撰の『伝』は、卷末に次のような撰述由来を記して

いる。

唐魯郡公顔真卿、永泰法貶吉州別駕、周遇法源大師、遂獲都灌頂法師、所著行狀並天台國清百録、輒撰其要旨、繼此伝云。

知られるようにこの『伝』は、『別伝』『百録』の記事にもとづいて成った。顔真卿(七一〇〜七八五)は、李希烈の反に応じないで希烈によって縊殺された。時に年七十六歳であった。彼の伝は『唐書』卷一五三、『旧唐書』卷二二八に出る。永泰(七六五年)の年をいうから、七六五年頃、この『伝』が選述されたことがわかる。

次の貝山沙門道澄という人については、何もわからないが、この『述讚序』が『別伝』に基づいていることは、末尾に「詳諸別伝焉」と記すことによつて知られる。

長安沙門曇羿胡撰の『影堂記』は、後記に、

大唐貞元四年(七八八)三月日、長安道人曇羿字達源記。

と記し、文中にも、「一昨建中之初(七八〇)、訪吾師之遺蹟」とみえるから、曇羿が仏隴峰の影堂(今日の智者大師真身塔を祭る真覺寺の前身であろう)を実地に訪ねて草したものであることが知られる。

ともあれ、この三点の資料は、湛然と同時代に成ったものである。成立年時が不明の道澄の『述讚序』は、『靈応図』卷二の編集順序からみると、恐らく顔真卿の『伝』以後、曇羿の『影堂記』以前に成立したものと思われる。

「序文」に、文諗(?)少康(?)八〇五)が編集したことを記すから、湛然の寂年の前後の頃に成立したものであるろうと思われる『往生西方浄土瑞応伝』(正蔵五一卷一〇四頁下)には、

(1) 顛禪師

の『伝』を載せている。他の各伝も総じて簡略であるが、西方願生者としての大師の伝記は、わずかに、

隋朝天台顛禪師、潁川人。陳代講浄名経次、忽見三道宝階從空而下、数十梵僧、執爐入堂、遶顛三週、顛遂告曰、吾從生已來、坐向西方、念阿弥陀仏、摩訶般若、觀音勢至、威神之力、不過此也、吾多請觀音懺悔、從染疾來、西方之念弥切、吾心隨去、有送藥者、答曰、病不與身合、年不與心合、藥豈能遣病乎、吾生勞毒器、死脱休帰、觀音勢至、今來迎我、令唱法花経題、讚曰、法門父母、慧解由生、微妙難測、絶於今日、又唱無量寿経、讚曰、四十八願、莊嚴浄土、花池宝樹、易往無人、又命維那曰、臨終聞鐘、增其正念、且各默然、吾將去矣、言訖而終、年六十、開皇十七年十一月二十四日遷化、造寺四十五所、度僧四千人、写経十五歳、造金銀旃檀像十萬餘體、即智者法空大師也。

とみえる。後記に

年来所伝之□保延元年(一一三五)火事焼失了
康治二年(一一四三)九月九日令改書之。

とみえ、その後も、

天徳二年(一一五〇)歲次四月二十九日唐辰木延曆寺度海沙門日延

大唐吳越州稱曰勸導伝持写之伝焉。
賜紫惠光大師

とみえる。外にも貞永元年（一二三二）、応安三年（一三七〇）の紀年がみえるから『瑞応伝』と共に行われた、我が国における大師伝の流布のほどがうかがわれよう。

又、大師伝との関係で、「慧命禪師」「僧法智」の諸伝が収められている点に注意される。

藍谷沙門慧詳撰『弘賛法華伝』卷四（正蔵五一卷二二頁中）

「修観」篇には、法華行者として、

(12) 隋天台山積智顓。

の『伝』を、「陳南岳慧思」の後、「唐天台山積智瓌」の前に載せている。『伝』の尾に

沙門灌頂、侍奉多年、歴其景行、可二十餘紙。

と記すように道宣の「智顓伝」を踏襲する。又、全巻の編次構成の面からみると、慧思―智顓―智瓌の三伝を列べて収める仕方は特異なものであろう。

「唐天台山国清寺積灌頂」（一八頁上）「隋廬山峯頂寺積大志」（二五頁下）「隋天台山積智越」（三四頁上）「唐藍田山悟真寺積慧超」（三五頁下）などの諸伝を載せる。

又『法華伝』が、遼の天慶五年（一一一五）に行なわれ、高麗国において勘校され、それが日本へ保安元年（一一二〇）に、宋人蘇景が高麗国から将らした本を、俊源法師が書写したものであることが、後記から知られる。正蔵の甲本には、『法華文句』の巻頭に付されている（正蔵三四卷一頁上）のと同

文の、鏡中沙門神道述『天台法華疏序』を附録するが、これなども天台系で本『伝』を評価したことを裏づけるであろう。さらに『法華伝記』卷二（正蔵五一卷五六頁下）「講解感応」篇に、

(13) 隋国師智者天台国清寺積智顓。

の伝を収める。天台大師伝としては、『弘賛法華伝』より後退するもので極めて簡略になっている。この点は『法華経』の弘経のあとかたを客観的に叙述し集成しようとした編集意図によるのであろう。

「唐国清寺積灌頂」（五七頁中）は、大師と同じく「講解感応」篇に収めているが、「陳南岳衡山積慧思」（五九頁中）「陳国師南岳大善」（同）「隋天台山国清寺積智越」（同）「唐台州国清寺積智晞」（六〇頁上）「唐天台山国清寺積智瓌」（六〇頁下）「唐終南山藍谷悟真寺積慧超」（六四頁中）などは「諷誦勝利」篇に収められており、又「顓禪師門人」の「隋国師南岳慧稠」（六一頁下）や「智者門人」の「隋新羅縁光」（同）などの僧名は注目されよう。

『法華伝記』の作者は、序文に、

抑祥宿殖所資、妙因斯発、流通一乘、讚詠真文、目聞未聞、耳見未見、昔始自姚秦訪道、暨于我大唐之有天下、流通之益、先代無之、感応無謀。非籌算能測、妙利擬遊、亦纒準所知乎、今聊撰集耳目見聞、動勵後輩信心、簡以十二科、分為十軸、部類・隠頭・

傳訳・支派・経序・論釈・講解・諷誦・転読・書写・聴聞・供養、各略引三五、編其分科、詞質而俚、欲見聞徒易悟、事竅而実、使来葉之伝信心(以下略)。

と記すように「祥」という人である。慶長庚子(一六〇〇)の年に、円智が誌す後書には、

唐僧祥公、不知其氏族、博聞達識之人、而記法華之應驗、誘愚昧之徒、殊載出傳訳等之科目、該括一化之始終、実維甚奇甚妙也、故盛行于世、為談者之資矣。

とみえるが、不明である。

宋代に入ると、禅宗燈史の一大集成である、道原纂(一〇

〇四年)『景德伝灯録』卷二七(正蔵五一卷四三二頁下)には、

禅門達者、雖不出世、有名於時、十人見録。

と記して、中に、

(14)天台山修禅寺智者禅師。

の伝を、「金陵宝誌禅師」「婺州善慧大士」「南嶽慧思禅師」に次いで収めている。これが後世禅宗系の天台大師伝の原形となる。禅宗の本流からは傍流のものとしてではあるが、天台大師伝が切り捨てられることなく相当の位置が与えられた点に注意してよい。

次に、宋福唐飛山沙門戒珠(九八五〜一〇七七)が撰した(一〇六八〜一〇七七)『浄土往生伝』卷中(正蔵五一卷一一五頁上)には、

(15)隋天台积智顛。

の伝が、「陳南嶽积慧思」(一一四頁中)「唐天台积灌頂」(一八頁中)と一緒に収められている。

隆興府石室沙門祖琇撰(一一六四年)『隆興仏教編年通論』(続蔵二乙・三・三・二五六頁左下)では、「隋紀・十七年」の下に、

(16)十七年、詔天台智者大師、大師顛赴命、至剡県示疾(中略)畢跣跣而逝。顛生陳代(以下略)

というような形で略伝を示し、

由是天下言仏教者、以天台為司南云。

と結んでいる。編年体の仏教史のなかで主要な高僧の行実を略述する、このような形式は『編年通論』をもってその嚆矢とするが、この形は『仏祖統記』『积氏通鑑』『仏祖歴代通載』『积氏稽古略』『仏祖綱目』(共に後出)などに継承されていく。

戒応が淳熙十二年(一一八五)に、『国清百録』を復刊するに際して附した『智者大師年譜事跡』(正蔵四六卷八二三頁上)などもこのような一連の研究動向の下で現われるのである。

慶元四年(一一九八)に成る、宗曉編(一一九八)『法華顛応録』卷上(続蔵二乙・七・五・四一三丁右下)には、

(17)天台智者大師。

の伝を「南嶽思大禅師」の伝に続けて収めている。末尾に、

凡諸事蹟、詳于別伝、及天台十二所道場記。

と記し、詳伝は『別伝』と、灌頂撰『天台智者大師十二所道場記』(欠)とに譲っている。

編者の宗暁(一一五―一二二四)については、改めていうほどでもないが、外に『四明尊者教行録』九卷(正蔵四六卷)『楽邦文類』五卷(正蔵四七卷)『楽邦遺稿』二卷(正蔵四七卷)などの著書があつて皆現存しており、四明天台を顕揚すると共に、天台浄土教を宣揚し、我が国の親鸞聖人は教学的基礎を宗暁から受けているといわれるほどである。しかし『顕心録』に載する伝は、天台大師伝としてみるべきものはない。

嘉定改元(一二〇八)の年に、雲間沙門士衡が編した『天台九祖伝』(正蔵五一卷一〇〇頁上)があり、中に、

(18)四祖天台教主智者大師の伝を載せる。列伝の祖は、

高祖龍樹菩薩、二祖北齊尊者、三祖南嶽尊者、五祖章安尊者、六祖法華尊者、七祖天宮尊者、八祖左谿尊者、九祖荊溪尊者。

を合せた九祖である。天台大師の伝は、道宣の「智顛伝」の形を踏襲しているが、「南嶽尊者」の伝が詳しいのと比べると、「教主」の伝としては簡略にすぎるといふような気がする。「余如別伝云」と結ぶから、詳伝は『別伝』に譲るつもりなのであろう。

極樂居士王子成集『礼念弥陀道場懺法』(続蔵二乙・一・一九二丁右)には、

(19)天台智者三昧往生。

の伝を、「往生伝云」として引用形式で載せている。

崇慶二年(一二二二)の、儒林郎応奉翰林文字同知制誥兼夔王府文学記室參軍武騎尉賜緋魚袋、李純甫撰『弥陀懺序』が成る頃、本書が成立したことが知られる。至順三年(一三三二)七月の、大都大覚住持日本国沙門至道の『重刊礼念弥陀道場懺法序』と、奉政大夫翰林修撰同知制誥趙秉文撰『弥陀懺讚』を冠する。後世の流伝の様子がうかがわれる。

咸淳五年(一二六九)に、四明福泉沙門志磐が、東湖月波山で著わした『仏祖統紀』卷六(正蔵四九卷一八〇頁下)には、天台宗祖として、

(20)四祖天台智者法空宝覚靈慧大禪師。

の伝を収める。考証は詳密を極め新説も含む点で他に類をみない。したがって大師伝の研究資料としては必ず参照されなければならないものである。『統紀』には外にも卷二七(二七四頁上)「浄土立教志」のなかで「往生高僧伝」として

隋天台智顛禪師。

の伝を載せているし、さらに卷二三(二四七頁中)「歴代伝教表」や、卷三七(九三五頁中)「法運通塞志」では、編年体仏教史のなかで天台大師伝を位置づけている。

又卷四九(四三八頁上・四四〇上)に収める、唐翰林学士染肅「天台禪林寺碑」唐安定梁肅敬之「智者大師伝論」(統藏一・二・四・一。一・二乙・七・四)も大師伝の研究資料として注意される。

宋の普濟集『五灯会元』卷二(統藏二乙・一一・一・八〇丁右上)には、「西天東土応化聖賢」の一人として伝を載せるが、わずかに、

(2)天台山修禪寺智者禪師。諱智顛、荊州華容陳氏子、在南嶽誦法華經、至藥王品曰、是真精進、是真名真法供養如来、於是悟法華三昧、獲旋陀羅尼、見靈山一会巖然未散。

と記すのみで、この程度の伝を編集した意図も不明なほどである。

元代に入ると、大徳九年(一三〇五)徑山虚舟普度(一一九九〜一二八〇)編『廬山蓮宗宝鑑』卷四(正蔵四七卷・三二二頁中)には、

(2)天台智者大師。

の伝を曇鸞伝の後、善導伝の前に載せている。

至正元年(一三四一)になった、嘉興路大中祥符禪寺住持華亭念常(一二八二〜一三四四?)集『仏祖歴代通載』卷一〇(正蔵四九卷五六〇頁上)で、隋文帝開皇二十三年丁巳の下に、

(2)天台智者禪師。示寂於開皇十七年十一月二十四日、師諱智顛(以下略)。

というように略伝を記す。「春秋六十七矣」を記す。念常は禪宗の人で臨濟宗の晦機の法嗣である。

至正乙未(一三五五)の年になる、覚岸(一二八六〜一三五五?)撰『釈氏稽古略』卷二(正蔵四九卷八〇四頁上)では、陳大建七年の下に、

(2)天台智者大師。此年至建康、禪師諱智顛(以下略)。

と記し、大師の生涯を略伝している。類書のなかでは、天台九祖」や「五重玄義」について紹介するなど、独自の功夫のあとがみられる。覚岸は『仏祖歴代通載』に、至正四年(一三四四)三月『序文』を製したほどであるからそれは極く当然のことであろう。

至正己丑(一三四九)の年に成り、至上丙午(一三六六)の年に上梓する運びとなった、瀨東沙門曇噩述『新脩科分六学僧伝』卷三(統藏二乙・六・三・二三六丁右上)には、

(2)隋智顛。

の伝を載せる。六学(慧学・施学・戒学・忍辱学・精進学・定学)十二科(訳経・傳宗・遺身・利物・弘法・護教・摂念・持志・義解・感通・証悟・神化)のうち、大師の伝は「慧学伝宗科」に収められている。

曇噩(一二八五〜一三七三)は、序文に記すように、天台山上に住したことがあり、五時教判にふれるほどであり、したがって本『伝』における大師伝も詳細で親切である。

明代に入ると、永樂十五年（一四一七）になる『神僧伝』卷五（正蔵五〇卷九七八頁上）には、

26 智顛。

の伝を収める。大師の神僧たる所以を、特に定光との出会い、玉泉寺建立の因縁、晋王蕭妃の疾を治したことなどで伝える。「春秋六十有七」説を採る。

萬曆十二年（一五八四）に成る、古杭雲棲寺沙門株宏輯『往生集』卷一（正蔵五一卷一二九頁中）には、

27 智者大師。

の伝を載せる。賛じて、

賛曰、大師、道德崇重、一家教觀、萬代宗仰、而捨壽之際、惟西方是歸、乃至疏觀經、著十疑論、恒於此諄諄焉、意可知矣、或曰、疏称心觀為宗、浄土其非実歟、噫大師謂、約心觀佛、不謂無佛、如其無佛、心觀何施、正報既然、依報亦爾、学台教者審之。

と記すが、『伝』自体は何の新味もない。

万曆壬寅（一六〇二）の年に成る、那羅延窟学人瞿汝稷槃談集『指月録』卷二（統蔵二乙・一六・一・二四丁右上）には、

28 天台山修禪寺智者禪師。

の伝も載する。『景德伝灯録』以来の禪宗系の大師伝の扱い方を継承するが、伝記内容は「事蹟甚広、具如本伝」と記し、『別伝』によって親切に紹介している。なかで天台学の概説までなし、「五時」「八教」や「六即」説などを紹介し

独自のものがみられる。

順治癸巳（一六五三）の年になる、浙江杭州府餘杭縣徑山興聖万寿禪寺住持伝臨濟正宗第三十一代孫通容費隱述『五灯厳統』卷二（統蔵二乙・一二・一・八〇丁右上）では、わずかに、

29 天台山修禪寺智者禪師。諱智顛、荊州華容陳氏子、在南嶽誦法華經、至藥王品曰、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、至藥王品曰、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、

と記すだけで、『五灯会元』の大師伝そのままをひき写しただけである。関心の低さを証するであろう。

又、黎眉等編『教外別伝』卷一六（統蔵二乙・一七・二・一九六丁右下）には、

30 天台智者禪師。

の伝を載せているが、これも、

天台山修禪寺智者禪師。諱智顛、荊州華容陳氏子、在南嶽誦法華經、至藥王品曰、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、至藥王品曰、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、

と、『会元』『厳統』の同文を伝えている。ただ割註の形で次のような大慧宋杲の批評を加えている点は注意されよう。

徑山杲云、而今未獲旋陀羅尼者、還見靈山一會否、若見以何為証。若不見是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、是真精進、却成剽法矣。

崇禎四年（一六三一）に、朱時恩が著わした『仏祖綱目』卷

二八(統藏二乙・一九・三・二二七丁右下、二三九丁右上、二三〇丁右上)にも編年体の伝がみられる。

(31)庚辰に「智覲參慧思大師」。

乙未に「智覲大師隱天台山」。

癸丑に「智覲大師說法玉泉」。

乙巳に「智覲大師示寂」。

又、本書には、董其昌撰の『序』が冠せられている。

同年、崇禎辛未(一六三二)の年に、梅鼎祚は『積文紀』全四十五巻を編輯している。拙著『国清百録の研究』で論じたように、編年体の形で『百録』収録の資料を忠実に採録しており注目される。

清代に入ると、乾隆四十八年(一七八三)に彭希涑撰『浄土聖賢録』巻二(統藏二乙・八・二・一〇一丁右上)に、(32)智顛。

の伝を載せる。『統高僧伝』『仏祖統紀』により、『浄土十疑論』の説を敷衍する点は特色がある。

清、周克復纂『法華経持驗記』巻上(統藏二乙・七・五・四五七丁左下)には、

(33)隋天台修禪寺智者大師。

の伝を載せる。「詳如国清百録等伝」と結ぶ。清代乾隆四十四年(一七七九)に、梅鼎祚の『積文紀』が『欽定四庫全書』集部八のなかに編入されたことを反映するのであろうか。

武原居士徐昌治覲周父編輯『道高僧摘要』巻二(統藏二乙・二一・四・二五三丁左下)には、

(34)積智顛。

の伝を収める。新味はないが『統高僧伝』の説を継いで、概ね妥当な伝である。

以上、概略したように、天台大師伝は、時代と共に種々に変遷していることが知られる。最初期につくられた。(1)「習禪者」としての人物像が、教団形成の過程で、(2)「天台宗祖」として鑽仰されていき、禅宗教団との対抗の歴史のなかでしだいに、(3)教学仏教者としての像を固定化していくのである。

又、この間に、(4)法華経の行者として、(5)浄土願生者として、あるいは(6)神僧その他として、大師伝の印象を幅広く展開していく。

なかでも、宋代になって、歴史学の盛行に応じて、従来の列伝体の大師伝から、編年体の大師伝を生むことは注目してよい。紀年にもとづく厳密な大師伝の研究が定着するわけである。

又、前述した外に鑽仰文献としては、次のようなものが現存し、研究に資するであろう。

○宋遵式『智者大師齋忌礼讚文』一卷(正藏四六巻・統藏二乙・三・一)。

○源信『天台大師注画讚』一卷(大日本仏教全書三三・恵心全集二)。

○源信『天台大師和讃』一卷(国文東方仏教叢書八・恵心全集二)。

○覚胤『天台大師和讃荻原鈔』一卷(宝曆五年刊)。

○実海『天台智者大師和讃聞書』一卷(寛文七年刊)。

最後に、根本資料である『天台智者大師別伝』の研究書としては、次のような末書がある。なかでも如海と忍鎧の研究は重要なものである。

○曇照『智者大師別伝註』二卷(統歳一・二乙・七・四)。

○如海『天台智者大師紀年録詳解』二卷(享保三年(一七七一)版)。

○忍鎧『天台智者大師別伝考証』三卷(元文六年(一七四一)版)。

○体素『智者大師別伝新解』二卷(昭和三十年、妙法院刊)。

○靈空『別伝幻々箋・詳解余説』二卷(寛永寺蔵)。

○可透『隋天台智者大師別伝句読』二卷(安永七年(一七七八)版)。

○敬雄『天台智者大師別伝翼註』二卷(寛永寺蔵)。

○慈本『天台大師略伝』四卷(嘉永元年(一八四八)版・大正十一年(一九二二)堀恵慶編纂・昭和五十一年山田恵諦再編、第一書房刊)。

○日詔『天台智者大師一代訓導記』二卷(寛文八年(一六六八)刊)。

○慈薫『天台智者大師伝略』一卷(明治二九年)。

尚、最近、清田寂雲「天台大師別傳畧註」(一)(二)〔叡山学院天台学講座〕一号、昭和五十六年以下)が発表された。『別伝』の読み下しと原文対校及び註釈を合せた着実な研究であり早く完結が待たれる。

以下では、天台大師伝の個々の具体例について、前述した研究資料を援用し、諸学説の是非を判定するであろう。

(次号に続く)